

第4学年 総合的な学習の時間学習指導案

指導者 橋本市立紀見小学校

教諭 岡村 久恵

1. 単元名

わたしたちの町 みんなの町

2. 単元の目標

- ・身体が不自由な方の生活の苦勞を知り、活動に活かすことができる。(知・技)
- ・身体が不自由な人たちの立場になって町の様子をとらえ、いい所を見つけたり、もっと住みよい町にするために自分たちができることを考えたりする。(思・判・表)
- ・障がい者福祉を通して自分たちが生活している地域に関心を持ち、さらに住みよい街にするために自ら考え、協力して行動することができる。(主学)

3. 単元について

(1) 教材観

この単元では、児童たちが、自分たちに身近な地域について障がい者福祉の視点から現状を見て改善すべき点を考え、実際に行動していく。児童たちは二年生ではまち探検、三年生では、地域の商業施設への見学と、地域について実際に見て学んできている。

紀見小学校は、坂の上であり校区も坂が多い。車道と歩道は分かれているが、傾斜が急なため、車椅子では移動がしにくいところもある。周りには杉村公園という大きな公園や駅などの公共施設もあり、多くの人が行きかっている。また、コンビニなどの商業施設もある。車いす体験や全盲になられた方からの話を聞く体験、点字教室等をもとに、今までの自分の認識だけでなく、新たな視点から地域を見直し、多面的に物事を考え、問い直す力を育成していきたい。

(2) 児童観

本学級の児童は、学習活動に関しては意欲的に取り組み、自分の疑問を調べたり行動したりできる。しかし、自分の意見を伝える場面になるとまるでお客様ようになってしまう児童が多くいる。今回の福祉学習で、学んだことをもとに、考えたことを行動に移す場面で、児童に表現の仕方を二つの方法から選択させ、自分の意見を伝える機会を作りたい。

(3) 指導観：

最初に、点字教室、車いす体験をしたり、後天的に全盲になられた方の話を実際に聞いたりし生活するうえでの苦勞を実感させる。普段の自分たちの生活と照らし合わせて、町の工夫に興味を持たせる。

次に、自分たちの住む地域が住みやすい地域か、どんな工夫をしているかを実際に見に行く。その中で「これは大事だな。」「もっとこうしたらいいんじゃないかな。」「もっとこんなことを知りたい。」という児童の思いを全体で共有し次に自分たちがどんな行動をするべきか考えさせる。

最後に、①考えたことをもとに実際に行動する。②調べたことをくわしくまとめる。の二つのグループに分かれ、さらに小グループに分ける。①のグループでは、地域や学校で自分たちにて

きることを考え実行する。②のグループでは、今まで学んだことや、さらに知りたいと思ったことについて調べたことを新聞という形でまとめていく。複数のグループが違うことを行うので、安全に留意する。

(4) ESD との関連

・学習を通して主に養いたい ESD の視点

【公平性】：障がい者の方の苦勞を知ることを通して、みんなが住む町の公平性の大切さに気づくことができる。

【責任性】：学んだことをもとに、考えたことを実際に行動に移していく中で、最後までやりきる責任性の大切さを理解することができる。

・学習を通して主に育てたい ESD の資質・能力

クリティカルシンキング

さまざまな体験の後に地域を見直す活動を取り入れることによって、今まで疑問を持たずに生活していた地域について、いい所を見つけるのはもちろん、改善点を出したり代替案を出したりと、考え直す力を身につける。

システムズシンキング

さまざま体験をすることによって、多面的に物事を考える力を身につける。

4. 評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
◇生活と結びつけつつ、体験活動を行うことができる。(知・技)	◇身体が不自由な人たちの立場になって町の様子をとらえ、町の工夫や改善点を考える。(思・判・表)	◇自分たちが生活している地域をさらに住みよい街にするために自ら考え、意欲的に行動することができる。(主学)

5. 単元展開の概要

全15時間

主な学習活動	学習への支援	◇評価 ・備考
1 パラリンピックの映像を見せて障がいを持つ人に興味を持たせ、みんなが暮らしやすい社会を作るためにできることを考えていくというめあてを持つ。	2, 3年生で地域について学習したことを思い出す。	◇自分たちが生活している地域をさらに住みよい街にするために自ら考え、意欲的に行動することができる。(主学)
2 点字教室		◇生活と結びつけつつ、体験活動を行うことができる。(知・技)
3 車いす体験		
4 全盲になられた方の話を聞く。		

5 学んだことをもとに考えたことをまとめる。

6~7 自分たちの住んでいる地域を歩き、町の工夫や改善点を見つける。

8 自分たちが見つけた町の工夫、改善点を全体で共有し、自分たちにできることを考える。

9 小グループに分かれる。

① は、どんな行動をするか決定する。

② は、どんな内容について新聞にまとめるか決定する。

10~15 グループに分かれ、それぞれ行動する。



学んだことをもとに、もう一度自分たちの地域について見直すことを伝える。

児童の身近な場所を中心に回り、自分たちの問題であるという当事者意識を持たせる。

児童が主体的に動けるように、表現の仕方を自らで選択させる。

① 考えたことをもとに実際に行動する。

② 調べたことをくわしくまとめる。

安全に留意させる。

スロープ制作の様子



障がい者等用駐車スペース制作の様子

◇自分たちが生活している地域をさらに住みよい街にするために自ら考え、意欲的に行動することができる。(主学)

◇身体が不自由な人たちの立場になって町の様子をとらえ、町の工夫や改善点を考える。(思・判・表)

◇身体が不自由な人たちの立場になって町の様子をとらえ、町の工夫や改善点を考える。(思・判・表)

◇自分たちが生活している地域をさらに住みよい街にするために自ら考え、意欲的に行動することができる。(主学)

◇自分たちが生活している地域をさらに住みよい街にするために自ら考え、意欲的に行動することができる。(主学)

6. 成果と課題

今回の学習で、児童は自分たちの住んでいる町を見直し、多様な人々が暮らしやすい町について考え、実際に行動することができた。

しかし、自分たちの学習で考えたことや行動を、障害者の方たちのために“してあげる”というような感覚をもっている児童もいたように思う。

さらに、バリアフリーについては学習したが、たとえば、‘視覚障害者誘導用ブロックは、視覚障害者の方にはバリアフリーとなるが、車いすの方などにとってはバリアになり得る。’というように、誰かにとってのバリアフリーが、誰かにとってのバリアになることもあるということも伝え、多様な人が暮らしやすいユニバーサルデザインの考えの大切さをおさえるべきであった。また、そのために、もっと多様な人々との出会いの場を作るべきであった。